

## 第8章

# コロナ禍を中高生は どのように受けとめたのか

— 自由記述の回答に着目して —

佐藤 昭宏\*

### 第8章まとめ

- 本章では、「中高生コロナ調査」における対象者が、どのようにコロナ禍を評価したかに関する選択肢や自由記述の回答データを確認することで、中高生のコロナ禍の受けとめの実態とその背景の検討を行いました。最初にコロナ禍の受けとめ方に関する質問紙調査の選択肢と基本的な属性変数とのクロス集計を行いました。その上で、自由記述の回答データを使って、①どのような語句の出現回数が多いのか（特徴のある語句の把握）、②特徴のある語句どうしがどのような関係性にあるのか（共起関係）を確認しました。
- クロス集計の結果、大都市に暮らす生徒ほどコロナ禍の影響をプラスに受けとめる比率が高く、都市規模が小さくなるにつれて比率が減少する傾向がみられました。ただしそれらの結果の背景に別の要因が影響している可能性があり、追加分析を行った結果、都市規模によるコロナ禍の受けとめ方の違いの背景に、公立と私立の差や都市規模による自治体の差が影響を与えている可能性が示唆されました。
- 自由記述分析の結果、コロナ禍の影響をプラスに評価した生徒の中には、自分のペースで学習ができたことや趣味の時間が増加したことなど、純粋なプラスの影響を感じている生徒と、通学しなくて済むなどマイナスの影響が減ることをプラスに評価した生徒の2タイプが混在していることが分かりました。2タイプのプラス評価やマイナス評価の理由を整理し活用することで、今後の支援についてより課題に応じた対策の検討が可能になると考えられます。

\*ベネッセ教育総合研究所

## 1. はじめに

これまでの章では、コロナ禍が休校期間中の中高生の生活や学習、進路に与える影響をさまざまな切り口から確認してきました。この章では、同調査の「総合的に考えて、今回の新型コロナウイルス拡大に伴ういろいろな出来事は、あなたにとってどのような影響を与えましたか」の質問に対する選択肢やその理由に関する自由記述の回答データ（3,755名）を用いて、中高生がどのようにコロナ禍の影響を受けとめたのかを見ていきます。

本章では大きく2つの分析結果を紹介しします。

1つ目は、**コロナ禍の受けとめ方に関する選択肢と関連が予想される基本的な属性変数とのクロス集計の結果**です。自由記述の分析や結果の解釈を行う前に、中高生のコロナ禍の受けとめ方がどのような変数と関係しているのか、全体傾向の把握を行いました。

2つ目は、**自由記述の回答データを用いたテキスト解析の結果**です。頻出語の抽出や共起ネットワーク分析から意味あるグループを見つけ出し、それらの語句がどのような文脈で活用されているかを、回答データに戻って

確認しながら、中高生のコロナ禍に対するプラス評価、マイナス評価の中身をより深く理解することを試みました。

以上の2つの分析を通じて、コロナ禍の中高生の受けとめ方の実態把握と、今後の休校措置期間の支援の在り方を検討するための観点の入手を目指します。

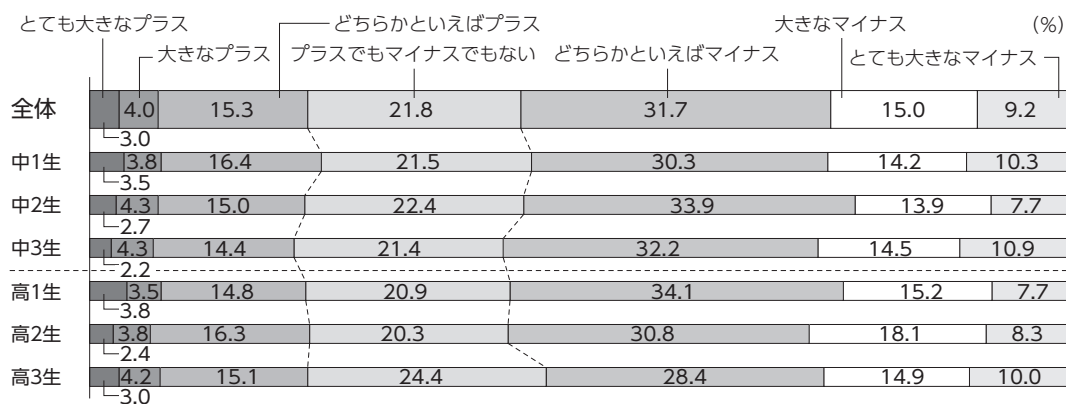
## 2. 属性別にみるコロナ禍の受けとめ方 —クロス集計を中心に—

### 2.1. 学年別

コロナ禍の受けとめに関する自由記述の分析やその解釈の前に、まず関連する質問紙調査の選択肢を用いて全体傾向を確認しておきましょう。【図8-1】は、学校段階・学年別に、コロナ禍の影響の受けとめ方を確認したものです。縦軸が学年推移、横軸がコロナ禍の影響の程度（「とても大きなプラス」から「とても大きなマイナス」までの7段階尺度）を示しています。

まず全体の結果をみると、コロナ禍の影響を「プラス」（「とても大きなプラス」「大きなプラス」「どちらかといえばプラス」の合計、以下同様）と回答した比率は22.3%、「プラスでもマイナスでもない」と回答した比率は

図8-1 学年別 コロナ禍の影響の受けとめ方



※ p = 0.711、有意差なし。

21.8%、「マイナス」(「とても大きなマイナス」「大きなマイナス」「どちらかといえばマイナス」の合計、以下同様)と回答した比率は55.9%となっています。この傾向は、学年にかかわらず共通しており、全体としてコロナ禍の影響をマイナスに捉えた生徒が半数を超えることが明らかになりました。分析前は、中学生と高校生ではメディア利用の在り方や行動制限に対する対応の違いからコロナ禍の受けとめ方に何らかの違いがある可能性を想定していました。しかし、分析の結果、学校段階や学年によるコロナ禍の受けとめ方に、統計的に有意な差は確認されませんでした。

## 2.2. 性別

では性別の結果はどうでしょうか。縦軸に性別、横軸にコロナ禍の影響の程度を示したクロス集計の結果が【図8—2】です。「プラス」の比率は、男子22.9%、女子は21.7%とほとんど差はみられませんでした。一方、「マイナス」の比率をみると、男子で53.8%、女子で57.7%と女子においてわずかではあります、コロナ禍の影響をマイナスに捉える傾向がみられました。

## 2.3. 成績層・高校タイプ別

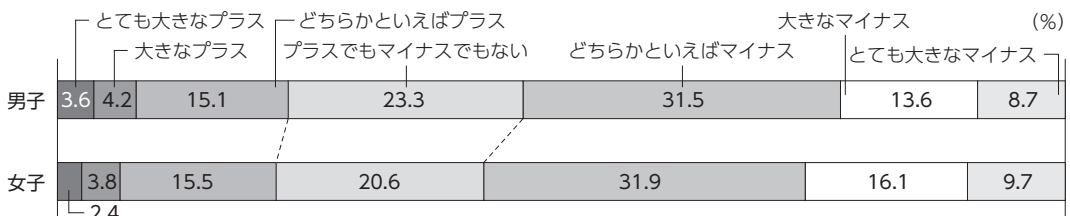
次に成績層や高校タイプ別に受けとめ方を確認してみましょう。今回の休校期間の影響を考えた時、学習面において成績の高い生徒は比較的学校のサポートに頼らずとも家庭学

習を進めることができたかもしれません。しかし、成績の低い生徒は、学校の授業や学習サポートを得られなかったことが家庭学習を進める上で大きなハードルになっていた可能性があります。また、高校生は、高校のタイプによって進路や学ぶ内容、学び方が異なるため、それらがコロナ禍の受けとめ方に何らかの影響を与えていることが考えられます。そこで成績層や学校タイプ別にコロナ禍の受けとめ方を確認しました。その結果が【図8—3】です。中学生の成績層や高校タイプによるコロナ禍の受けとめ方に一貫した差はみられませんでした。

## 2.4. 休校期間の長さ別

もう少し他の属性変数も加えて受けとめ方を確認してみましょう。例えば、新型コロナウイルスの感染は、拡大状況に応じて、どの程度の長さの休校期間を設定すべきかの対応の違いをもたらしました。こうした休校期間の違いは生徒のコロナ禍の受けとめ方にどのような影響を与えたのでしょうか。【図8—4】をみると、短期(～2か月)と中期(3か月くらい～)といった休校期間の長さの違いによって受けとめ方の差はみられませんでした。より長期間の休校を強いられた学校の生徒ほど、コロナ禍の影響をよりマイナスに評価する傾向が浮かびあがるのではないかという予想をもっていました。結果をみる限り、休校期間の長さではない別の要因によっ

図8—2 性別 コロナ禍の影響の受けとめ方



※ p = 0.038、危険率 5% 水準で有意。

てプラス・マイナス評価が規定されている可能性が明らかになりました。

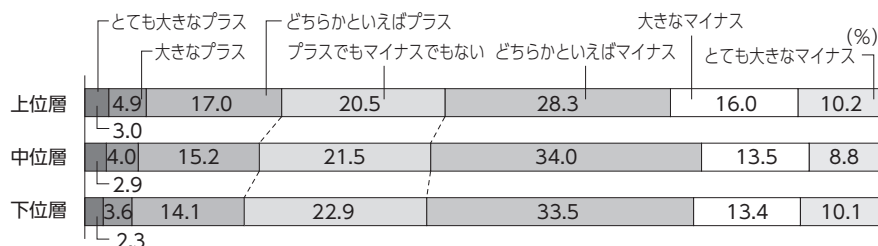
## 2.5. 都市規模別

では、都市規模はどうでしょうか。【図8

—5】の縦軸が都市規模、横軸がコロナ禍の影響の程度です。より規模の大きな「政令指定都市・特別区」の結果からみてみましょう。「プラス」と回答した生徒の比率の合計は25.4%で、その次に大きな「15万人以上」

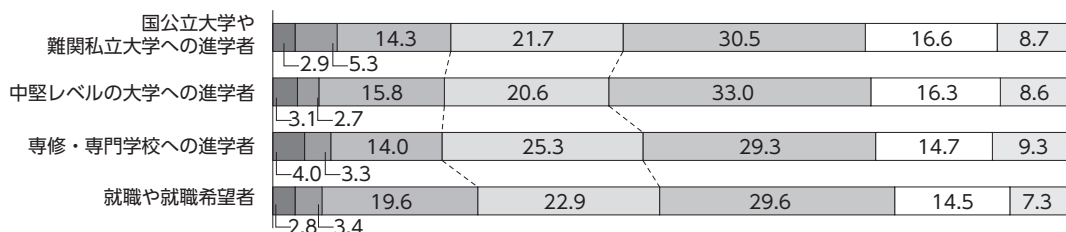
図8—3 中学生の成績層別・高校タイプ別 コロナ禍の影響の受けとめ方

### ■中学生の成績層別



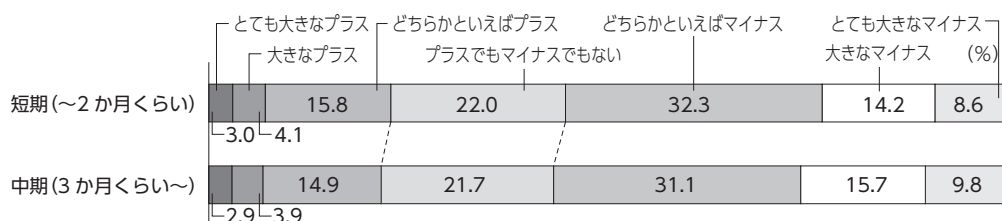
※ p = 0.416、有意差なし。

### ■高校タイプ別



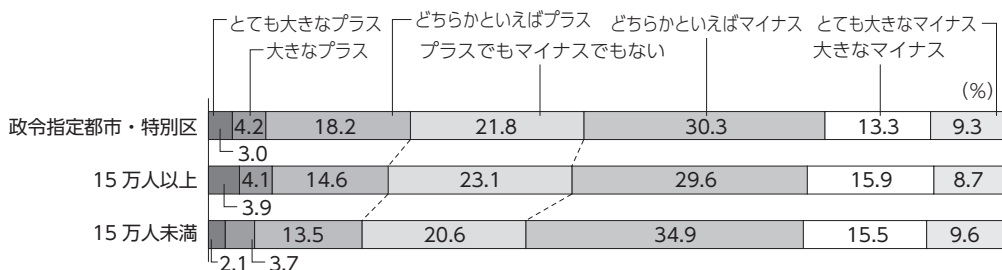
※ p = 0.853、有意差なし。

図8—4 休校期間の長さ別 コロナ禍の影響の受けとめ方



※ p = 0.669、有意差なし。

図8—5 都市規模別 コロナ禍の影響の受けとめ方



※ p = 0.003、危険率1%水準で有意。

の同比率をみると22.6%、「15万人未満」は19.3%となっており、都市規模が大きいほどコロナ禍をプラスに受けとめた生徒の比率が高いことが分かります。「プラスでもマイナスでもない」の比率は、都市規模にかかわらず20%前後で安定しており、プラスとは逆の「マイナス」の比率の合計は、都市規模が大きくなるほど低い傾向がみられました。

これらの結果からどのような示唆が得られるでしょうか。考えられるのは、何か別の要因によって規定されているものが、都市規模の違いとして見かけ上現れている可能性です。例えば大都市ほど、経済的に裕福な家庭が多く、家庭の経済力の違いが、コロナ禍の受けとめ方に影響を与えている可能性があります。また、大都市ほど私立学校に通う生徒の比率が高いため、公立と私立・国立等の学校種の違いが影響を与えている可能性も考えられます。そこでさらに追加分析を試みました。それらの結果が【図8-6】(家庭の社会経済的地位 (SES) 別コロナ禍の影響の受けとめ方)、【図8-7】(学校の種類別コロナ禍の影響の受けとめ方)、【図8-8】(学校の種類×都市規模別コロナ禍の影響の受けとめ方)です。

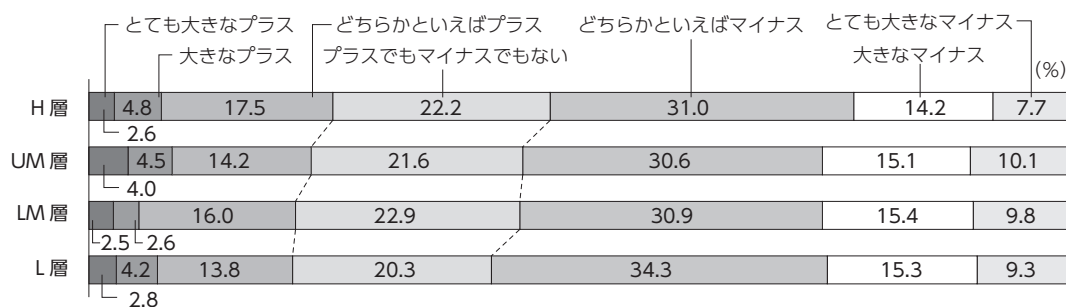
分析の結果、家庭の社会経済的地位 (SES) によるコロナ禍の受けとめ方の差は確認

されませんでした。しかし、公立と国立・私立など学校類の違いによるコロナ禍の受けとめ方には差がみられ、これらの違いは中学生、高校生で共通していました。2020年4月から高校無償化の対象が私立学校にも拡大し、授業料などの格差は是正される方向にありますが、授業料以外の費用を含めると依然私立で費用が高い傾向がみられます。以上の傾向から家庭の経済力とは関係のない公立と私立・国立の設備や変化に対するフォローやフットワークの差が間接的に影響を与えている可能性があります。

加えてもう1点、学校の種類別に都市規模によるコロナ禍の受けとめ方の違いを確認してみました。その結果、公立においてのみ都市規模の大きさとコロナ禍の受けとめ方に統計的に有意な差が確認されました。同じ公立学校でも都市部ほどスピーディに1人1台端末の導入が進むなど、自治体の財政力の差が、コロナ禍に対する学校教育の対応差につながり、子どもの受けとめ方に影響を与えた可能性があります。

以上が、主な属性変数とのクロス集計の結果からみてきた中高生のコロナ禍の受けとめ方の特徴です。第3節では、これらの特徴を踏まえつつ、中高生のコロナ禍の受けとめ方をより深く理解するために自由記述のテキスト分析を行いました。

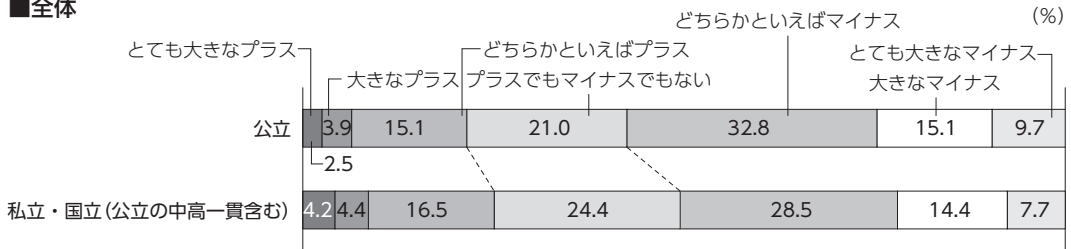
図8-6 家庭の社会経済的地位 (SES) 別 コロナ禍の影響の受けとめ方



※ p = 0.132, 有意差なし。

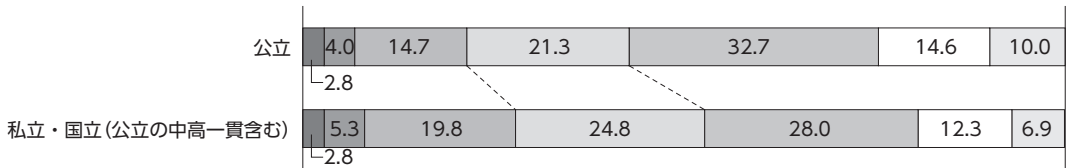
図 8-7 学校の種類別 コロナ禍の影響の受けとめ方

■全体



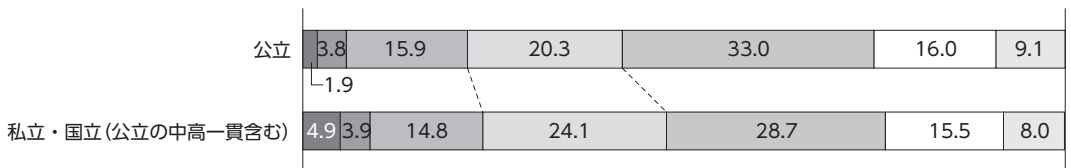
※ p = 0.003、危険率 1%水準で有意。

■中学生



※ p = 0.043、危険率 5%水準で有意。

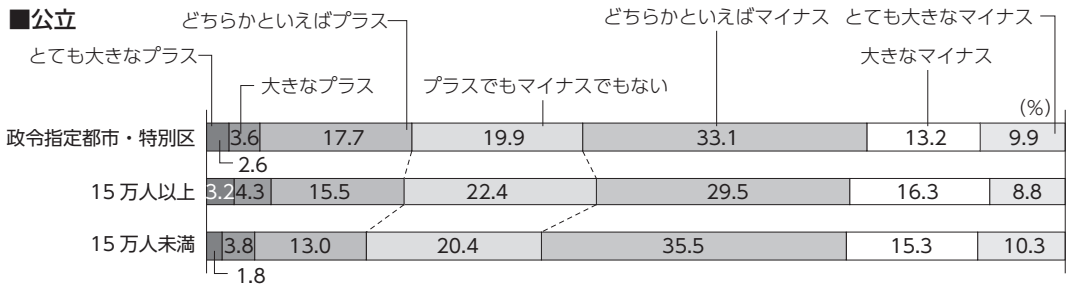
■高校生



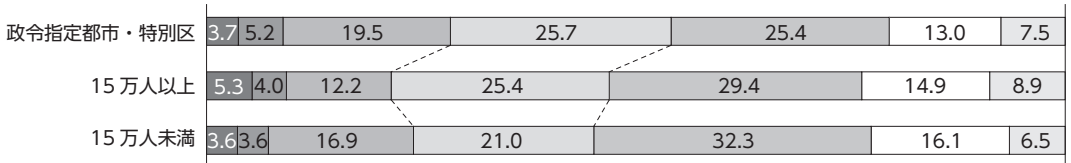
※ p = 0.011、危険率 5%水準で有意。

図 8-8 学校の種類×都市規模別 コロナ禍の影響の受けとめ方

■公立



■私立・国立



※公立×都市規模別：p = 0.029、危険率 5%水準で有意。

※私立・国立×都市規模別：p = 0.280、有意差なし。

### 3. 中高生のコロナ禍の受けとめ方に関する自由記述のテキスト分析

最初に分析手順を簡単に説明します。分析には、樋口耕一氏が計量テキスト分析のために開発したフリーの解析ソフトウェア KH Coder を活用しました。

まず 3,755 名の回答データのクリーニングを行いました。具体的には入力された記述内容の誤字脱字や読み込みができない中高生特有の絵文字、不必要な空欄などの削除を行い、同義語や表記揺れの統一を行いました。その上で、前処理を行い、品詞別に出現頻度の高い語句を確認するとともに実際の回答データに戻りながら、語句の切り出し方や区切りを検討し、分析データの整備を行いました。

以上のような準備をふまえて実施した分析結果が、3.1. に示す頻出語の抽出、3.2. に示す共起ネットワーク分析です。分析に使用したのはコロナ禍の影響を「とても大きなプラ

ス」「大きなプラス」と評価した回答者(837名)と、「とても大きなマイナス」「大きなマイナス」と評価した回答者(2,099名)の自由記述で、分析は評価別を実施しました。

#### 3.1. 頻出語と出現回数からみた特徴

最初にそれぞれの頻出語(上位50語)の確認を行いました。その結果を示したものが、以下の表8-1、表8-2です。

##### ①プラスに捉えた生徒の抽出語

まず、コロナ禍を「プラス」に捉えた生徒の抽出語【表8-1】からみてみましょう。最も出現回数が多いものとして、「時間」(239回)や「自分」(196回)が挙がっています。これと関連して上位に「増える」(165回)、「考える」(109回)、「出来る」(85回)などの動詞があがっています。また、上位には「趣味」(68回)、「家族」(49回)などの名詞も見られ、休校期間中、趣味や家族にふれる時間をプラスに感じた生徒の存在がうかがえます。その

表8-1 コロナ禍を「プラス」に捉えた生徒の抽出(上位50語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
時間	239	過ごす	37
自分	196	良い	36
学校	169	プラス	34
勉強	167	機会	32
増える	165	当たり前	32
考える	109	感じる	31
思う	95	知る	31
コロナ	88	自由	30
出来る	85	部活	30
家	77	好き	28
趣味	68	ウイルス	27
休校	65	減る	27
行く	53	人	26
今	53	オンライン	25
生活	52	自粛	24
家族	49	行事	23
友達	49	多い	23
授業	48	感染	22
経験	47	行動	21
たくさん	45	普段	21
期間	44	少し	20
学習	42	活動	19
楽しい	41	将来	19
大切	41	過ごせる	18
休み	38	進路	18

他では、「勉強」(167回)、「学習」(42回)などの語句も頻出語として抽出されました。

### ②マイナスに捉えた生徒の抽出語

次にコロナ禍を「マイナス」に捉えた生徒の頻出語【表8-2】を確認してみましょう。最上位の10位までをみると「学校」(616回)や「行事」(465回)、「勉強」(367回)、「友達」(297回)、「部活」(243回)などが挙がっており、関連する用語として「中止」(282回)、「減る」(273回)などの語句の出現回数も多くなっています。50位以内でみると、「大会」(159回)、「夏休み」(102回)、「修学旅行」(83回)なども上位に挙がっていました。不安(127回)、制限(108回)などネガティブな印象を与える名詞も上位に挙がっており、その関係からか「減る」とは反対の「増える」(114回)という動詞も上位にランクインしていました。全体に、日ごろの学校生活や学習活動の制限によって、不安が増していた様子がうかがえます。

## 3.2. 共起ネットワーク分析

以上のような頻出語を確認した上で、次に抽出語間の関連性を把握するために共起ネットワーク分析を試みました。分析結果から得られる共起ネットワーク図は、出現パターンが似通った語句同士が線で結ばれ、語句間の共起関係が要約して示されるため、視覚的に意味あるまとまりを見つけ出しやすいという特徴があります。その結果を手掛かりにテキストデータを再度読み込むことで、自由記述の内容をより深く理解することができます。円の大きさは語句の出現頻度を、語句間を結ぶ線の太さや距離は、語句間の共起関係の強さを表現しています。

### ①プラスに捉えた生徒の分析

【図8-9】は、コロナ禍をプラスに評価した生徒の共起ネットワーク図です。分析の結果、11個のグループが抽出されました。

全体を通してみると、①家族や趣味などに費やす時間がふえた、②進路について考える

表8-2 コロナ禍を「マイナス」に捉えた生徒の抽出(上位50語)

抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
学校	616	自分	98
行事	465	遅れる	96
勉強	367	外出	95
友達	297	コロナ	89
中止	282	学習	87
減る	273	多い	86
生活	265	修学旅行	83
部活	243	最後	82
出来る	210	受験	82
楽しみ	200	マイナス	80
時間	187	感じる	79
思う	186	会える	76
行ける	183	感染	76
大会	159	今	76
行く	147	出る	71
休校	144	家	70
授業	142	楽しい	69
不安	127	自由	69
増える	114	遅れ	64
活動	112	残念	62
制限	108	少ない	62
夏休み	102	心配	61
高校	99	人	61
無くなる	99	遊ぶ	60
マスク	98	ストレス	56







行に自由に行けなくなった、⑦受験の不安が増した、⑧友達と会ったり遊んだりする時間がなくなった、などが見えてきました。

(生活・進路面)

- 外出自粛や学校の休校で、色々と制限されることが増え、思うように生活できなかったから
- 卒業の年なのに、修学旅行など学校行事がことごとく中止となり思い出作りができない
- 家に高齢者がいるのでコロナ感染を考えると思うように外出できない
- 学校で行っていた課題探究の発表会や、文化祭などの行事が中止になってしまったから
- オープンキャンパスや学校説明会、文化祭がなかったため進路を決めるのが大変になった

(学習面)

- 学習面においては自分一人では勉強が出来ないが、一人で勉強せざるを得なかったから
- 学校や図書館、塾が全て閉まり、元々家で勉強する習慣がなかった私にとってはいきなり家でずっと勉強するということができなかった
- 家庭学習や塾に行き勉強している人との差が大きくなった

学習面については家庭学習の習慣や学習法が身につけていない生徒において、特にマイナス影響が大きかった可能性があります。ネガティブな捉えという点では、「やりたいことができなくなったこと」と「コロナで負荷が高まったこと」の大きく2つの側面がありそうです。

#### 4. おわりに

この章では、中高生のコロナ禍に対する受け止め方に関する選択肢や自由記述の回答データを用いて、全体的な受け止め方の傾向を確認、その上でプラス評価やマイナス評価を構成している内容やその背景理解を試みてきました。

分析から得られた結果は、大きく3点です。

第一に、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う休校期間の長期の影響をみるために休校期間の長さ別にコロナ禍の受けとめ方を比較したところ、統計的に有意な差は確認されませんでした。このことから、休校期間の長さが、直接コロナ禍の影響をマイナスに捉えることにつながっているわけではないことが分かりました。

第二に、都市規模別にコロナ禍の受けとめ方を比較したところ、大都市に暮らす生徒ほどコロナ禍の影響をプラスに受けとめる比率が高く、都市規模が小さくなるにつれてその比率が減少する傾向がみられました。そこで、都市規模の背景に影響していそうな変数との追加分析を行いました。その結果、家庭の社会的地位（SES）はあまり関連がないこと、しかし、家庭による差が公立と私立の違いという学校教育を経由して間接的に影響を与えている可能性が明らかになりました。また、公立学校に通う生徒には都市規模による違いがあり、自治体による施策の差が表れている懸念があります。

第三に、コロナ禍の休校期間をプラスに受けとめた生徒の中には、現状がより良くなったという意味でプラスに評価をしている生徒（学習がより効果的に進んだ、進路や将来検討の時間が増えた等）と、不安やネガティブな要素が払拭されたという意味でプラスに評価している生徒（学校に行かなくて済む等）

がいて、両者でプラス評価の根拠が大きく異なることが明らかになりました。

以上の結果から得られた示唆は大きく2点あります。

1点目は、過半数の生徒がマイナスに評価したコロナ環境下において、むしろプラスに評価した子どもたちの回答から得られる示唆です。コロナ禍の影響にどう対処するかを、子ども自身や子どもの捉え方の問題として責任転嫁するつもりはありませんが、今いる環境をポジティブに捉え直したり、うまく「やり過ごした」事例を、子どもたちの間で共有することで、お互いに触発し合えることがあるのではないかということです。

2点目は、今回明らかになったマイナス評価の要因を整理することで、より適切な対策

を講じることができることです。抽出語や共起ネットワーク図の結果を基に元の自由記述を確認すると、特に学校行事やイベントが中止になったことは、中3生や高3生といった卒業学年の生徒たちを中心に大きなマイナス要因として挙がっていました。一度しかない中学・高校生活をどのように充実させるか、機会を喪失したままにするだけでなく、新しい機会をどう創造していくか。このような課題を契機に、より一層学校外のリソースを柔軟に活用していくことを検討しても良いのではないのでしょうか。学校として対応できること、生徒個人が対応すべきことを整理しながら、コロナ禍との付き合い方を中高生はもちろん、子どもを取り巻く関係者も蓄積していきたいところ です。

#### 【参考文献】

- 樋口耕一,2004,テキスト型データの計量的分析：—2つのアプローチの峻別と統合—,理論と方法,19(1):101-115.
- 樋口耕一,2020,社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して 第2版,ナカニシヤ出版.
- 公益財団法人日本財団、三菱 UFJ リサーチ & コンサルティング株式会社,2021,  
「コロナ禍が教育格差にもたらす影響調査—調査レポート—」,  
[https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2021/06/new\\_pr\\_20210629.pdf](https://www.nippon-foundation.or.jp/app/uploads/2021/06/new_pr_20210629.pdf)
- 松岡亮二,2020,『教育格差—階層・地域・学歴』筑摩書房.
- 文部科学省,2020,新型コロナウイルス感染症の影響を踏まえた公立学校における学習指導等に関する状況について,  
[https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt\\_kouhou01-000004520\\_1.pdf](https://www.mext.go.jp/content/20200717-mxt_kouhou01-000004520_1.pdf)